

出羽国府跡出土唐三彩緑釉半紋胎陶枕の意味

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 博之 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24843

出羽国府跡出土唐三彩緑釉半紋胎陶枕の意味

山口 博之

はじめに

陶磁製の枕である陶枕は現代ではあまり使用されないが、頭の熱を取る心地よさがあり、古くから身近にあった器物である。俳諧では三夏（陰暦4・5・6月）の季語として採られ、陶枕を当てた午睡の安らぎを表す句が詠まれている。

陶枕に興味を抱いたのは、古代出羽国府跡城輪柵跡で、唐三彩緑釉半紋胎陶枕が出土しているからである。東北地方の有力な古代官衙遺跡からは、中国唐代～五代の陶磁器は出土するものの唐三彩の出土は報告されていない。現在のところ、東北地方では唯一の出土資料であり日本最北の出土事例となる。

小稿ではこの唐三彩陶枕に注目し、その意味付け（存在意義と周辺状況）を探ってみたい。

まず古代出羽国府跡出土資料について述べ、次いで、資料の周辺を広く探り、知り得た内容を整理してみたい。

1、古代出羽国府跡出土の唐三彩陶枕

山形県の日本海側酒田市の北東に位置する城輪柵跡は、古代出羽国府跡として国史跡に指定（1932年）されている。唐三彩緑釉半紋胎陶枕陶片（図1）は、政庁北方地域の発掘調査（平成4年度第42次発掘調査第5調査区）で、後殿西建物の北西約100mに位置するSK155遺構周辺から出土した。この地区の出土遺物の主体は9世紀半ば前後となる。

この陶片は、東北では類例のない唐三彩として注目を集めた。おもな評価を紹介すれば、井上喜久男氏は「唐三彩陶枕」であると見る（井上 2001）。巽淳一郎氏は唐三彩「三彩陶枕片」

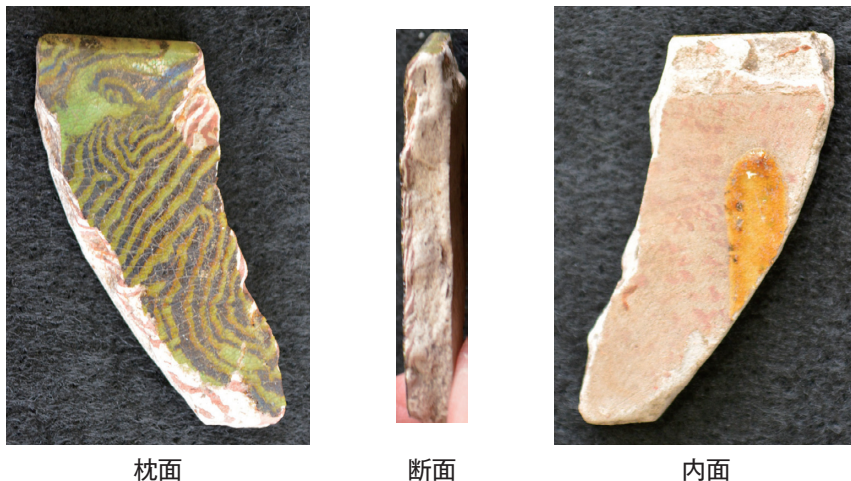


図1 唐三彩緑釉半紋胎陶枕陶片 唐三彩陶枕

であると見る(巽 2002)。亀井明德氏は当初「宋代緑釉絞胎枕」であると見たが(亀井 2003)、後に、全国の出土遺跡(図11)を集成・分析し、「晩唐・五代期陶枕」であり鞏義市黄冶窯製品と見解を改めている(亀井 2014b)。さらに山口県立萩美術館・浦上記念館他で開催された、『唐三彩展—洛陽の夢』の図録中の「日本出土中国三彩地名表」にも掲載された(上田ほか 2004)。ついで『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』の、第三章消費遺跡解説中の表1「東日本施釉陶器出土遺跡数」にも採られている(愛知県史 2015)。

出土した陶片は枕面の小破片であり、全体は角が丸みを帯びた箱型を呈し枕面がやや凹む形(凹面枕)で、おそらく後ろが高く前がやや低くなる形をとる。緑釉が掛けられ、素地の5分の1ほどの厚さに加飾の絞胎片を貼り付けた半絞胎である。胎土は白色できめが細かく、やや硬質である。法量は最大値で縦4.5cm、横1.9cm、厚さ0.6cmを計る。生産年代は中唐から晩唐(謝明良氏ご教示)と考えられる。

こうした唐三彩陶枕は古くから良く知られ、河南省鞏義市黄冶窯の製品が多い。黄冶窯は隋代に開窯、調査では唐三彩陶枕の生産窯が調査され、緑釉絞胎陶枕が出土している。絞胎器は黄冶窯の第二期(618~684)から出現し、全絞胎から半絞胎製品へと変化する。第三期後半(684~756)に半絞胎製品が出現し中心となり、四期(841~907)にも生産される。これらは、前面の中ほどに0.8cmほどの焼き損じを防ぐ透気孔をもち、底面は無釉であり支釘痕が残る。大きさは高さ7cm前後、横幅15cm前後、縦幅10cm前後の小ぶりなことが多い(河南省文考研 2016)。中唐から晩唐に半絞胎製品は盛んに生産されたことがわかる。

城輪柵跡出土例の絞胎土は、褐色の陶土と白色の陶土を練り合わせたもので、黄冶窯の製品では一般的なものである。白色の胎土に、ごく薄くそいだ絞胎土(約1ミリ)を被せ加飾している。胎土の五分之一ほどの厚さである。絞胎の模様であるが、斜めに空白の部分があるので、これを区画と見、さらに平行線が数条斜め

に揃うところに注目すれば、枕面中央に大きな菱形の区画文を持ち、枕面の四隅は木目文となるのであろう。類似する例として偃師市商城博物館蔵の黄釉絞胎枕(図2)が挙げられる(上田ほか 2004 P90)。中央の菱形区画中に二重にロゼットの団花文を組み合わせ、枕面の四隅は木目文を構成する事例である。

黄冶窯の絞胎陶枕には黄釉・褐黄釉・青黄釉さらに緑釉などが施されている。黄釉系統のものが多く緑釉はすくない。亀井明德氏が整理している日本の出土状況を参考にしても、黄釉系統がほとんどである(亀井 2014a)。日本の出土資料には、全絞胎陶枕に緑釉が施されている資料はあるが、出羽国府跡と同様な緑釉半絞胎陶枕は見当たらない。

この時期城輪柵跡周辺では初期貿易陶磁器が移入されていた。邢窯白磁碗、越州窯青磁碗などである(山口 2010)。唐三彩緑釉陶枕は、やや意味合いは異なるがこれら初期貿易陶磁器に伴ってこの地にもたらされたものであろう。この地域への初期貿易陶磁器と施釉陶器の移入ルートは、陸奥国府から陸路を通じてもたらされた可能性を考えることもできるが、出羽国自体はもともと越後国から北に出た端(出羽)地域が分かれたものであり、日本海側の地域である。日本海舟運により移入された可能性が高いと考えている。

もう一つ注目したいのは城輪柵跡を守護する



図2 偃師市商城博物館蔵の黄釉絞胎枕
(上田ほか監修 2004より)

ように北側に聳える鳥海山（2236m）と、鎮座している大物忌神である。大物忌神は国家の北辺を守護する神であった。大物忌神に共通する、物忌という神名を持つのは、伊豆諸島神津島に鎮座する「伊豆国物忌奈命神社」のみである。神津島は国家の東の辺境を形成する離島である。物忌を神名に持つ神は、国家の辺境を守護する重要な神なのである。

また、航海安全の神、遣唐使を助ける海上神でもあった。『続日本後紀』承和7年（840）7月26日条には、大物忌神が南方で賊に襲撃された遣唐使船を救ったとし、従四位下となり神封二戸を授けられた記事が載る。

国家辺境の重要な国家神かつ海上神に守られた、出羽国府から唐三彩が出土したことは、直接の関係はないが、意義深いことと感ずる。

以上、城輪柵跡出土唐三彩陶枕について述べた。次に資料の周辺（唐三彩陶枕・緑釉・絞胎・陶枕）について触れ、本資料出土の意味を確認したい。まず、鉛釉を関係詞としよう。

2、鉛釉陶枕の焼造と用途

唐三彩緑釉絞胎陶枕は鉛釉陶器の一群となる。鉛釉陶器は酸化鉛を媒溶剤として、酸化鉄や酸化銅、コバルト、マンガン等を加えることによって褐釉、黄釉、緑釉、紅釉、紫釉、藍釉などに発色させた彩釉陶器である（弓場 2002）。エジプトで使用が早くその技術は確立したが、比較的低い温度で焼成が可能であるためか広い地域で盛んにつくられた。

謝明良氏は中国とそれ以外の国の所蔵品を検討し、中国の鉛釉陶器の出現は戦国時代（前770～前221）であり、戦国時代から唐代までが一つの画期と見る（謝明良 2014a）。漢代には盛んに制作され、以降の時代も制作が継続された。唐代には唐三彩が焼造され、その中の器物の一つが城輪柵跡出土の陶枕となる。

まず、日本での鉛釉陶器と陶枕の生産はどのようなものであったのだろうか。実は、中国唐代に並行する時期に日本でも鉛釉陶器が焼造され、器物の一つに陶枕がある。ただし絞胎器の

焼造は見当たらない。

最初に、奈良三彩で陶枕が焼かれているかどうかであるが、まず正倉院三彩には含まれていない。ただし檜崎彰一氏は奈良三彩の焼造器種のうち、特殊品として「香炉・火舎・甗・釜・硯・鼓胴・枕・須弥山」などをあげている（檜崎 2002）。陶枕の焼造を記すが、実は資料として確認できる奈良三彩の陶枕は明らかではない。

そもそも奈良三彩の窯跡もあまり明確ではない。高橋照彦氏は奈良時代の三彩陶器の窯は、現状では不明であるとしつつ関係資料として、京都府相楽郡木津町市坂の瀬後谷瓦窯から8世紀前半頃の緑釉瓦塔が出土。平安時代初期には、二彩陶器の焼成が京都市左京区岩倉幡枝町の栗栖野瓦窯跡群中の21号窯で行われたことを報告している。瀬後谷瓦窯・栗栖野瓦窯はいずれも官営瓦窯と判断され、これに付属する形で三彩陶器生産が行われていたのだろうという（高橋 2002）。奈良三彩の陶枕の焼造の具体的様相は明らかではない。

日本の鉛釉陶器は大陸の技術を受けて制作された。高橋照彦氏は、日本の鉛釉技術のもととは7世紀後半の朝鮮半島経由とし、8世紀を中心とする奈良三彩の技術は唐三彩の技術要素（抜臘法を用いた施釉や型抜き成形など）が欠落するところがあり、唐の工人が直接来邦したと見るよりも、遣唐使の関与を想定しつつ、部分的技術移入によるものではないかとする（高橋 2002）。降幡順子氏は、釉薬の鉛含有量の分布から見れば、日本と中国の制作技術は近似し「広い地域で鉛釉陶器の制作に適した組成に関する知識が共有されていたものと考えられる」という（降幡・巽 2010）。東アジアの技術大系の中で日本で焼造されたのである。

日本での陶枕焼造の確実な事例は、中国では晩唐にあたる平安時代前期となる。愛知県みよし市の9世紀後半の黒笹90号窯跡（K-90）で緑釉陶枕が焼造されている（図3）。製品は、ロクロ水曳きされた円筒を縦位で変形させ方形とし、透気孔を小口面に設け、底面以外に草花文・四弁花文・雲文などを描くものである（愛知県史 2015）。『日本の三彩と緑釉』には緑釉

陶器の窯跡とともに生産された器種が集成されているが、陶枕の焼造は、黒笹90号窯跡だけが記載されている（五島美 1998 P158～160）。

制作技法と紋様に注目すれば、黄冶窯の唐三彩陶枕の場合、6枚の粘土板を貼り合わせて成型し、施文は模印（スタンプ）を多用し、彩色を加飾する。黒笹90号窯跡の場合は、あらかじめ円筒を作成し変形させて成型し、文様は棒状の工具で描き込み、多彩釉・絞胎の加飾は見られず相違している。透気孔の位置も異なる。施される草花文・四弁花文・雲文などのモチーフは、唐風であり類似しているが独立的である。唐三彩陶枕の紋様とは様相を異にし、長沙窯陶枕とも違っている。獣形枕の焼造も見られない。

ただ、重要なのは、唐代に重なる陶枕の生産窯は、中国以外では日本にしか存在しないことである。日本では複数の窯で生産（黒笹90号窯跡で陶枕焼造、大安寺出土品中の国産陶枕の存在）が行われた。これは、日本において陶枕という器物が、必要とされていたことを示している。

唐三彩陶枕は日本で広く受容され、唐三彩では最も出土点数の多い器種となる。亀井明德氏は、日本国内の唐三彩出土遺跡を集成し74遺跡を上げている（図11）。このうち陶枕（亀井氏分類の筐型品を含む）が出土したのは29遺跡となる（亀井 2014）。約40%の遺跡から出土して

いることになる。なお、『黄冶唐三彩窯の考古新発見』に収められた「唐三彩出土遺址文献一覧」には、中国国内の唐三彩出土遺跡、319遺跡が集成されているが、このうち唐三彩陶枕が出土した遺跡はわずか15遺跡（生産窯を除く）であり約0.4%に過ぎない（奈文研 2006）。さらに興味深いことに、謝明良氏が紹介している、韓国の唐三彩出土遺跡では11遺跡のうち3遺跡（新羅王京遺跡〈S1E1地区〉・皇龍寺・味吞寺）で唐三彩陶枕が出土している（謝 2014b）。これは約27%を示し日本の出土様相と近似する。韓半島でも日本と同様に必要とされる器物であったのだろう。

なお、唐三彩を理解する場合、初唐・盛唐の製品と限定して考え、晩唐・五代を除外するなど厳密を期するが、本稿では資料に直接あたるものが出来なかったため、厳密な確認が出来ず参考資料の記述に従わざるを得ない。謝明良氏が日本の唐三彩出土遺跡を集成し、初唐・中唐の製品とするのは、64カ所である（謝 2014b）。

（1）大安寺出土の唐三彩陶枕

唐三彩陶枕と言えば、まず日本最多の唐三彩の出土遺跡である大安寺境内出土資料が上げられる。大安寺は南都七大寺のひとつであり、聖徳太子の創立した熊凝寺を起源と伝える。遣唐使として入唐した道慈（？～744）が、平城京に移し大安寺と称した。道慈は唐三彩陶枕の将来者の可能性が考えられている。栖崎彰一氏は、道慈は唐三彩の生産技術も持ち帰ったとし、鞆県（黄冶）窯の三叉支釘などの窯道具と正倉院三彩鉢の底部に見られる痕跡の共通性を指摘している（栖崎 1999）。なお、道慈将来説には様々な見解があるがここでは触れない。

昭和41年（1966）に大安寺小学校校庭の調査により、大安寺が火災にあった際の焼土や残焼物を含む土坑が検出され、中から多量の唐三彩片（奈良三彩を含む）が見つかり注目を集めた。2013年の小学校立て替え時調査でも出土し、合わせると約300片ほどが検出されている。興味深いことに出土唐三彩のほとんどは陶枕であった。陶枕の出土数量は中国国内の遺跡を含めて



図3 黒笹90号窯跡（K-90）緑釉陶枕
（愛知県 2015より）

検討しても突出している。

森下恵介氏によれば、これらの陶枕は従来、大安寺延喜11年(911)の火災廃棄かと考えられ、講堂・僧房の什器として考えられていた。だが平成25年(2013)調査で11世紀代の土器片が含まれていることが明らかとなった。このため寛仁元年(1017)の大安寺焼亡の火災廃棄と考えられ、さらに金堂に関する資料で、金堂内荘厳に使用された可能性が考えられるという(森下 2016)。廃棄の年代と備えられていた堂舎について、見解が加えられたのである。

講堂は古代寺院で僧尼が集会し、経典を講じ、法会を執り行い、説教・講義を行う堂である。この場合陶枕は法会などに備えられた可能性が高いことになる。金堂は、古代寺院の本尊をまつる伽藍の中心となる堂である。この場合本尊を荘厳するために使用された可能性が高くなる。薄暗い金堂の中にあつて色鮮やかな色彩を放つ唐三彩陶枕は、荘厳具として相応しいのかもしれない。さらに、寛仁元年火災による被災廃棄であるとすれば、200年以上も金堂内を荘厳していたことになり興味深い。

この資料についていくつか加えておきたいが、加藤瑛二・王小蒙氏は、盛唐期の作例であるとし「寺を造るときに瑠璃瓦、三彩瓦当などを造る技術がなければならぬので、これらの唐三彩枕は道慈が収集した色見本で(中略)唐三彩陶枕は小さく、携帯しやすい、同時にその色釉と紋様は美しく(中略)このような利点があるので道慈は枕を収集した」と見る(加藤・王 1999)。将来者と想定する道慈が、造寺にあたり建築資材の参考として、意図的にこれらの唐三彩陶枕を収集したというのである。

神野恵氏は制作技法が同一であり、制作年代に大きな差はないこと。紋様制作技法が多様でまったく同じ意匠、釉の配色がきわめて少なく、さまざまな装飾のものを故意に集めた可能性(知られている唐三彩陶枕紋様で大安寺出土陶枕にないのは「鬼面文」「駱駝文」など数えるほど)があること。奈良三彩の陶枕はほとんどないため、作成の参考品としてもたらされたのではなく、器物の意匠、装飾を持ち帰ること

を意図して陶枕を選んだ可能性があること。さらに大安寺の唐三彩陶枕には制作技法や胎土が異なるものがあり、複数の生産地が存在する可能性のあること。などを指摘している(神野 2010)。意匠を持ち帰るために選ばれたのが陶枕であると見るのである。

大安寺出土資料について、荘厳具・仏具・意匠見本などの見解が示されていることを把握しておきたい。さらに興味深いのは、唐代には様々な造形・意匠の陶枕が作られるが、大安寺では方形を呈する陶枕だけが出土していることである。韓国でもその傾向は伺われる。

(2) 分類と機能

大安寺出土陶枕については、さらに研究が蓄積されている。

大安寺出土陶枕の分類であるが、八賀晋氏は、1(平板を用いて立法形にしたもの)・2(上面を弧状にくぼませ、他の面は平面としたもの)・3(上面および前面、後面を弧状にくぼませたもの)とに分ける(八賀 1981)。巽淳一郎氏は同じく大安寺境内出土の陶枕について、6枚の粘土の平板を組み立て密閉構造にした箱型形態をⅠ類とし、さらにA形態(各面が完全に平坦な直方体構造のもの)・B形態(上面のみくぼむもの)・C形態(上面と長側面が内側にくぼむもの)とに分けている。Ⅱ類は絞胎陶枕で、組み立て方はⅠ類と同じであるがC形態はなし。Ⅲ類はⅠ類をまねて我国で生産されたもので、組み立て方は、厚い粘土板を敲いて平板(1~1.5cmが多い)とし6枚を接合するものと、直方体の筐型に粘土を押し付け上面・側面を成型したあと底部を貼り付けするものがあり、唐三彩陶枕とは法量が同じであるが、胎土組成などを含め異なるとしている。(巽 1984)。Ⅲ類が奈良三彩を含むのかどうかは明確ではないが、少なくとも唐三彩陶枕が蓄積された時代(延喜11年以前あるいは寛仁元年以前)には、大安寺に供給するⅢ類の陶枕(唐三彩と法量が同じ)に、日本で作成されたことは把握することができる。

神野恵氏は、方形枕(A形態):直方体・凹

面枕（B形態）：枕面のみ凹面をなす・撥形枕（C形態）長側面と枕面が凹面をなすものとに分けている（図4）。3つの形態はいずれも陶枕として把握されている（神野 2010）。ただ、形式と機能は必ずしも一致しないのは当然であり、このうち、方形枕については、枕であるのかどうかについて、疑問が出されている。

たしかに、陶枕として形態的に分離された器物は必ずしも、寝具の枕となるわけではない。ただしこれら大安寺出土品は方形枕・凹面枕・撥形枕と一緒に出土している。将来時期や生産窯・形態（時期差があるか）は違っていても、大安寺という仏教寺院で必要とされていたことは間違いない、ということには注意をしておきたい。

（3）陶枕の使用

唐三彩陶枕は中国でも仏教に関わっていた。謝明良氏は中国での仏僧の墓に仏具とともに埋葬された事例を紹介している。江西省瑞昌唐墓では仏僧の墓から方形枕が出土した。陶枕を仏僧が寺院で使用していた事例とし、奈良県明日香村坂田寺出土の唐三彩陶枕（方形枕）と類似形態と見た（謝 2021）。江西省瑞昌市の唐墓からは、青銅塔形頂合子・青銅塔式鎮柄香炉、青銅蓋鉢、そして方形枕の唐三彩陶枕（報告では脈枕）が出土した。塔形合子と柄香炉は、洛陽の神会和尚塔から出土したものと近似している

ことから、唐代の僧墓とし、資料は僧が残した仏具であるとする（何 1999）。中国でも仏具の中に唐三彩陶枕が存在するというのである。

唐三彩は当初から明器として、墓葬に関連する器物と見られてきた。事実墓からの出土が多い。だが一般に使用された日用什器も含まれている。インドネシア沖で発見された黒石号に積載された唐三彩の用途は、少なくとも明器ではない。韓国では骨蔵器（三彩鍍、慶州市朝陽洞出土、国立慶州博物館蔵）として使用されているが、日本で多いのは寺院と官衙での使用であり墓ではない。

日本での唐三彩陶枕の用途説について、謝明良氏は中国本土から韓半島、さらには日本を視野に入れて唐三彩全体の研究を進めた。日本出土の陶枕（方形枕（A形態）・凹面枕（B形態）・撥形枕（C形態））について、使用についての先行研究を整理している。すなわち各説を「(1) 具体的な用途に関係していない陶枕、(2) 枕、(3) Aは腕枕または書枕で、残りは陶枕、(4) 大安寺出土品は全て写経用の腕枕、(5) Aの元は金属部品がついた筐型品（箱の模倣品）で後に金属部品を喪失、(6) Aは筐型品でBは明器陶枕、(7) 三つの可能な用途があり写経や儀礼の枕と腕枕診察用の脈枕さらに携帯用の袖枕（首枕）、(8) Aは器座、Bは明器陶枕、(9) A～Cはいずれも宗教儀式に関する器物であり、仏具を載せた台座、経巻を広げる文鎮類」と9説に整理し、各説の提唱者についても触れている（謝 2014b）。

寝具の枕であつたり、書枕・腕枕・脈枕・箱型模倣品・明器陶枕・經典器座・經典文鎮などの用途が想定されている。大きくは寝具（枕）、支持具（書枕・腕枕・脈枕）、葬具（明器）、仏具（經典器座・文鎮）などの用途説と見ておきたい。明器を除いて、講堂で使用するか金堂を莊嚴するかの別、存在意義の軽重はあるが寺院運営あるいは経営に必要とされる器物であり、大安寺に収められるものとして相応しいのではなかろうか。なお、唐三彩陶枕の經典器座・經典文鎮説を含む唐三彩全体を含む解釈については、謝明良氏の先行研究があるので参考にされたい（謝 1985）。

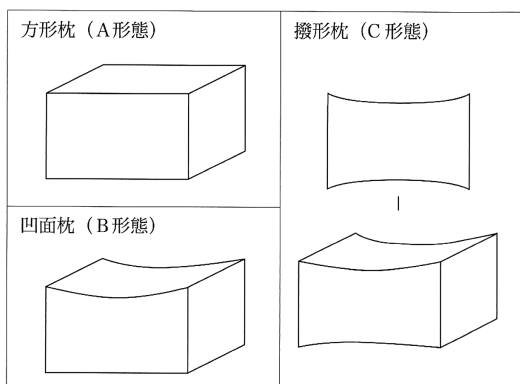


図4 陶枕分類

（神野 2010より）

補足しておきたいが、中医の脈枕として陶枕を考えるのは林士民氏によるものがよく知られている。浙江省の重要な対外港湾都市、寧波で出土した資料を医薬用具とし、唐宋代遺跡と五代北宋代窯跡から出土した資料を紹介している。このうち脈枕は、瓷器が3点・木質が1点あり、I式として紹介したのが青磁獸座枕（図6）である（林 1982）。ただし、獸座枕と木質枕は寧波市和義路遺跡から出土したもので、他のものは寧波周辺の窯跡から出土したもので、一括性や時期などの同一性はなく、どのように使用されたのかということについても触れられていない。この青磁獸座枕については後に触れたい。

さて、唐三彩陶枕の用途説の中で性質が異なるのは明器説である。亀井明德氏は、A類：凹面形陶枕－枕面が凹面形（撥形を含む）・B類：筐形品（図4のA形態）－6面全てが平板な直方体形の2種類に分け、形態の理解をさらに絞っている。さらに「A類の上面を凹形にし、下面を無文・無釉とする器形は、種々の枕（腕枕・脈枕・袖枕）としてではなく、「頭枕」としての実用品である。B類の直方体形品で、上下面に施文・施釉する器形は、枕としての機能・特徴を欠き、明器としての（錢）櫃（筐）と考える。」とする（亀井 2014a）。頭をのせる凹みをもたない方形枕は、枕ではなく、墳墓の中に埋めるために特製した非実用的な明器であり、死者の来世の生活に供した箱型品（（錢）櫃（筐））とするのである。器座・文鎮などとしての陶枕は大安寺に備えられるのに問題はなかろうが、方形枕明器説はいささか性質を異にする。

（4）方形枕と錦御枕

高橋照彦氏は、方形枕を『承安元年（1171）御装束絵巻物』に見える、伊勢神宮の祭祀具である「錦御枕」に似るため、これも枕に属すると見る。記載される「錦御枕」の法量も唐三彩の筐型品と似ているとし、古く伝えられたものが伝統として残されたとする。亀井氏のB類は、枕と見ることが自然であると見る（高

橋 2012）。「錦御枕」と方形枕の共通性は重要な指摘である。

唐三彩の明器のうちには方形を呈するもの、あるいは方形品に脚などを付けた、錢函や竈・井戸枠などがある。しかしながらこうした器物と方形枕は異なるとする見解は重要である。謝明良氏も高橋照彦氏の説を引きながら、方形枕は実用の枕に属すると見ている（謝 2014b）。さらに謝明良氏は、方形枕（A型）と凹面枕（B型）について、A型が黃冶窯においては唐代中期に生産の中心があり、B型は唐代晩期に生産の中心を持ち、年代的に継承関係にあると整理し、同様に陶枕に属するとする（謝 2021）。高橋氏・謝氏の説に従いたい。

高橋照彦氏が指摘した方形枕、「錦御枕」について、さらに知ることができる。伊勢神宮の神職であった矢野憲一氏は、伊勢神宮では20年に一度、式年遷宮を行い、御装束・神宝を新調し納めるが、この中にある「錦御枕」（内宮）・「御枕」（外宮）について触れている。古くは、康保4年（967）に施行された『延喜式』に「錦枕二枚。長各五寸五分。広三寸八分。厚二寸四分。」と記される。『長曆官符』ほかにはさらに詳しく「中子作檜。表以赤地唐錦裏之。」と記され、現代も同じく新調されるという。「錦御枕」（内宮）は「赤地四色唐花唐草文唐錦」で、「御枕」（外宮）は「赤地三色唐花唐草文唐錦」と記される、装飾性豊かな枕である。重ねて「この御枕が先に記した唐三彩の陶枕と材質と色彩は異なるものの、大きさや図柄がほぼ同じ（中略）唐時代の最高級品を日本の最高級品に取り入れている」と指摘する（矢野 1996）。

康保4年には唐王朝はすでに滅亡し、陶器製の唐三彩陶枕と、檜を中子とし錦を表面に貼りまわす枕は異なるが、形態は方形枕（図4 A形態）となる。さらに、唐三彩陶枕と同じ装飾文様を繊維製品の錦で示すことは重要であり、延喜式の記載が現代まで変わらずに継承されているとの認識に従えば、延喜式の時期に枕として認識されていたものに、方形枕があり、それは唐三彩陶枕と同じ装飾文様を持つことに注意する必要があるだろう。考えてみれば、聖武天皇

の遺愛の品を納めた正倉院に残る『国家珍宝帳』には、「白練綾大枕一枚（底部縦67.7cm・幅33cm・高28.5cm）」が記され、同時に「御軾二枚 一枚紫地鳳形錦 一枚長斑錦」とある。枕と軾（脇息）は錦で飾られるものであったのである。

以上の検討からすれば、方形枕・凹面枕・撥形枕は、いずれも枕としての実際の寝具としての機能を有していた器物と見ることが可能となろう。加えれば、黒笹90号窯で9世紀後半に緑釉陶枕が焼造されるが、高橋照彦氏によれば、平安時代の緑釉陶器は、食器と仏器との二つの使用法が確認できるが、実用の食器としての用途が中軸になる点に大きな変質があるという（高橋 2002）。従来、緑釉陶器は祭祀に使用される器物として考えられてきたが、実用の器物として、黒笹90号窯の緑釉陶枕が焼造されたとすれば、大安寺の陶枕も実用のものであった可能性があろう。

ただし、唐三彩陶枕の実際の使用については、確定を見たわけではないことは付言しておかななくてはならない。

さて、城輪柵跡の唐三彩陶枕に戻ろう。先ほども触れたが謝明良氏は、鉛釉陶枕の実用例を示している。城輪柵跡で出土した凹面枕（B型）は唐墓からの出土事例が存在する。黄釉枕が河

南省偃師宣宗大中元年（847）穆棕墓（M1025）で、人体頭部上方から。さらに唐三彩陶枕が陝西省銅川新区西南変電所1号墓（M1）（図5）で、人体頭部下から出土している（謝 2021）。頭の位置に存在する枕の実例が見つかったのであり、唐代には実用の陶枕が存在したのである。

以上の先行研究を参考とすれば、出羽国府跡で出土した唐三彩緑釉陶枕は、錦に飾られた寝具に類するもので、頭に当てる枕として使用されていたのであろう。出羽国府に赴任した、平安京にあって唐風文化に馴染んで生活していた官人が実用したものに相応しいと考えておきたい。さて次に絞胎技法を関係詞とし、更に資料を見てみよう。

3、絞胎技法

城輪柵跡出土の唐三彩緑釉半絞胎枕は、白色の胎土に、ごく薄くそいだ絞胎土（約1ミリ）を被せ加飾する、精巧な器物である。絞胎土は褐色の陶土と白色の陶土を練り合わせたものである。絞胎は日本では練上（手）などとも呼ばれ、異色の土を重ねたり、練込んだりして模様を出す技法で、ヨーロッパの陶磁器にも広く見ることができる。

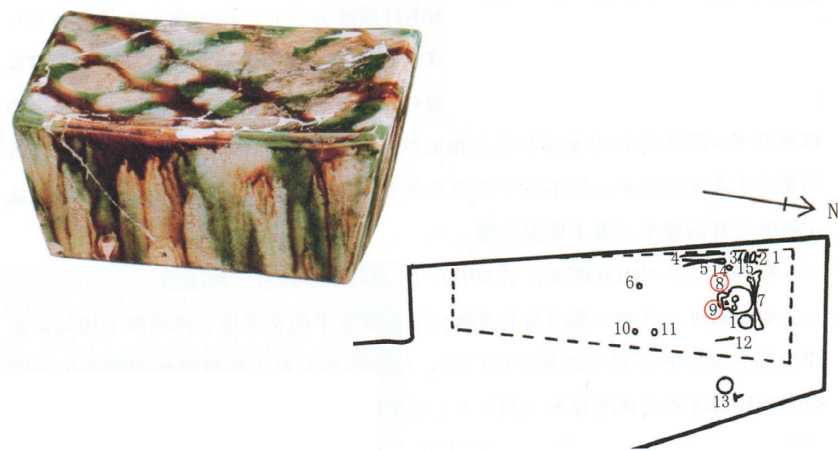


図5 陝西省銅川新区西南変電所1号墓（M1）唐三彩陶枕と出土位置

* 8が三彩枕、9が開元通寶（口中に含む）（謝明良 2021より）

日本で陶器への使用が早いのは、16世紀後半から焼かれ始めた美濃焼である。この中に練上志野がある。白土と赤土を混ぜあわせた絞胎土を使う（佐々木 1991）。白土は一般の志野の素地であるが、赤土は鉄分の多い陶土を用いている。奈良・平安時代には見られない。

黄冶窯の事例でも絞胎は白土と赤土の2種を練り合わせることが多いが、この文様の外郭と中心点にさらに赤みの強い土を配置する、3種の陶土を合わせる場合もあるようである（河南省鞏義市文保管編著 2000 彩版 62-2）。

中国で絞胎技法は古い。憑農氏は、中国で最も早い絞胎器の事例として、広東省肇慶市の康樂中路で調査された、漢墓（M9）から出土した耳杯を取り上げている。耳杯は赤と白の二色が互いに交差して練りあわされた全絞胎である。同時に出土した陶器（珠飾・陶鴨・陶羊圈）にも絞胎器がある。さらに絞胎の起源についても諸説を整理し、犀皮漆器説（凹凸のあるざらざらした肌の漆器）・癭器説（虫こぶ木器細工）・西方玻璃器説（ローマ帝国時代のガラス器）を示している（憑 2019）。ローマ帝国からの技術伝播に、絞胎技法があったかどうかは不明であるが、絞胎器は漢代に出現するという。ただ漢代の技術が唐代の絞胎器焼造に結びついたかどうかについては明らかではなく、盛んに絞胎器を作るのは唐代になってからである。さらに、絞胎陶枕の焼造は唐・宋が中心であり、後代の遼・金・元代の陶枕には少ない（孔 2014 P12 表2-1）。特に唐代陶枕の装飾には、絞胎が相応しいと考えられたと思われる。

なお唐代の絞胎器は青磁でも焼造され、有名な半絞胎青磁枕「青釉絞胎伏獸座枕」（図6）がある。先ほども述べた浙江省寧波市和義路遺跡で1975年に出土したもので、高さは9cm 長さは11cm 幅は7.5cm と小型である。平坦な枕面は花卉形を呈し、褐色と白色の絞胎剥片による靈芝紋が貼付される。獸が底板に伏せる獸座となる。浙江省越州窯製品である（曹 2008 P122）。こうした青磁の半絞胎製品は非常に少ない。

（1）絞胎陶枕と繊維製品

唐代の絞胎器に陶枕が多いのは何故だろうか。胡彦羽氏によれば、唐代絞胎器は墳墓・窯跡・城跡など、14遺跡から出土しているが、このうち8遺跡の事例は陶枕であるという。また唐代の絞胎器を焼造した窯跡として、河南省黄冶窯・山西省渾源界庄窯・河南省洛陽市瀍河東岸唐代窯跡・河南省榮陽茹園窯・陝西省銅川市黄堡窯を上げている。さらに、陶枕の法量は長さが10～15cm（多いのは10～13cm）・幅が8cm～10cm・高さが5～8cm程度のものが多数を占め小型であり、宋代になると大型化し特に長さが30cmに近いものがあらわれるという（胡 2008 P4 表1唐代絞胎器統計表）。

唐代と後の時代の陶枕の形態は違い、唐代から元代まで連続して作成されるのは、方形枕（正・長）と透かしを入れた彫塑枕である。宋代に器種や大きささらには絞胎の文様にも大きな変化があり、以降の時代に受け継がれていく（孔 2014 P13 表2-2）。

先ほども触れたが、もう一つ注意しておかなくてはならないのは、唐三彩半絞胎陶枕の装飾が、同時代の繊維製品と似ることである。史林花氏は絞胎枕に使われている紋様と、唐代に流行した服飾様式との類似を示した。当時の服飾の美しさを参考にして、陶磁器の上に表現したものが半絞胎枕であると見る（史 2019）。事実、唐代の甘肅省敦煌莫高窟藏經洞から発見された



図6 半絞胎青磁枕「青釉絞胎伏獸座枕」

（曹 2008より）

「夾纈菱格花卉文幡」(図7)は図2と共通する文様構成を示している。こうした唐三彩文様と繊維製品の関係についての指摘は、謝明良氏がすでに行っている(謝明良 1985)。思い起こせば、伊勢神宮の「錦御枕」(内宮)は「赤地四色唐花唐草文唐錦」で、「御枕」(外宮)は「赤地三色唐花唐草文唐錦」で装飾されていた。

こうした事例を敷衍させれば、そもそも枕を錦などの布で包むことが行われていて、その延長で、枕自体に繊維製品の文様を加飾されたと見ることはできまいか。たしかに、唐代皇帝代宗(在位762~779)の葬送儀礼について記した『大唐元陵儀注』には、仰甕(平瓦)を黄帛で包んで枕としていたことが記される(稲田 2018)。枕とされる器物を、黄色の絹布で覆って使用する場合があります、現代の枕カバーのように、綿もまた使用されたのではなかろうか。

絞胎の文様は、絹布や錦などで枕を包むことがまず存在し、さらにその紋様(夾纈の文様など)を枕本体に写した(半絞胎の加飾)のではないかと考えてみたい。

次に枕を関係詞として、出羽国府の官人がどういう思いで唐三彩陶枕を頭に当てたのか。この時代、枕についてどのような認識があったのかを考えてみたい。



図7 甘肅省敦煌莫高窟藏經洞
「夾纈菱格花卉文幡」

(史 2019より)

4、唐代の枕

城輪柵跡の唐三彩は、使用した官人にいかなる夢を見せてくれるのであろうか。唐代陶枕について、さらに探ってみよう。

(1) 陶枕の形態

まず陶枕の実物の焼造開始であるが、謝明良氏は隋代の張盛墓(開皇15年(595))のものが早いと紹介している(謝 1985)。張盛夫婦合葬墓は河南省安陽市で調査されたものであり、陶枕(「瓷枕1件、枕面凹下、両端翹起」)が記載されているが、実物の掲出はない。また出土した陶枕は「長0.039米、寛0.023米、高0.024米」であり明らかに小さい(考古所安陽隊 1959)。死者へ明器として供えたものであろうか。

唐三彩陶枕の形態の多様性は、加藤瑛二・王小蒙氏の研究が詳しい。両氏は、先行研究を踏まえながら、第一類箱形枕と第二類獸形枕とに大きく分けた。さらに第一類を8類型、第二類を5類型に分けた。これらの分類は中国唐代の陶枕の類型を示している。すなわち第一類A型(条形枕:細長いもの)、B型(長方形枕)、C型(ほぼ方形のもの)、D型(東腰形枕)E型(長方形で枕面中央の凹が著しい)、F型(長方形で角が丸みを帯びる)、G型(枕面が半円形のもの)、H型(枕面が海棠の花形のもの)。第二類A型(犀枕)、B型(獅子枕)、C型(虎枕)、D型(象枕)、E型(ウサギ枕)である(加藤・王 1999)。このほかには器材枕があり、おもに宋・金・元代に建築を表す建築枕、さらには人物枕などが磁州窯・景德鎮窯などで出現する。

黄冶窯で報告された三彩陶枕には、A型:虎頭枕・B型:長方形体・C型:弧面がある。A型は獸形枕、B型は大安寺にみられる陶枕である。

黄冶窯の、C型の陶枕は緑釉が施され、枕面に魚文を持つものでおそらく全体が丸みを帯び扁平で、大ぶりの資料かと思われる。こうした資料は宋代に発達する形態であるが、唐墓からの出土が報告されている資料がある。鞏義市芝

田唐墓の88HGZM90唐墓から出土した三彩枕は、詳しい記載はないが、全体が丸みを帯びた大ぶりの形（加藤・王のG型に近いが扁平）で、枕面に大きく牡丹文を施す（鄭州市文考研編 2003 彩版24）。

日本にもたらされたもの以外に、いくつかの形があり、時代が新しくなるにつれて形態が増加することを把握しておきたい。

さて、黄堡窯では、枕面を如意頭につくり左右側面の円文に透かしを施す磁器製陶枕（図8）が、少ないものの焼造されている（陝西省考研所 1992 図129）。この資料は、茶葉末釉車輪座枕で、枕面は16cmを計る。車輪を陶枕の意匠に取り入れたもので、枕側面には中央に車軸と思われる突起を配し、4本の輻の間に透かしを持つ（杜 2018）。さて、透かしを持つ枕と言えば、沈既済の唐代の小説『枕中記』が思い起こされる。

（2）陶枕の使用

『枕中記』は、官吏登用試験に落第した盧生が、趙の都邯鄲で、道士の呂翁から榮華が意のままになるという不思議な枕を借りて寝たところ、次第に立身して富貴を極めたが、目覚めると、枕頭の黄粱がまだ煮えないほど短い間の夢であったというものである。人生の榮枯盛衰のはかないことを譬えている。いわゆる「邯鄲の枕」「盧生の夢」「高粱夢」である。『枕中記』は中国の文学作品ではあるが、日本で中世には能の『邯鄲』が作られ、近代には芥川龍之介がこれを翻案し『高粱記』を記すなど、良く知られていた。『枕中記』の枕は「其枕青磁、而其両端有竅」であり、枕は青磁でその両端に竅（あな）があると記されている。茶葉末釉車輪座枕を連想する。

ついで、ほぼ同時代の長沙窯で焼造された青黄釉枕の底面には「開平三年（909）六月廿八日開造 夏月二女使用」の刻銘が記されている（李 2004）。夏に女性が使用する枕とすれば、午睡の涼を求める伝統的な陶枕の使用に相応しい。この陶枕の形態は変わっていて、後方長側面に火燈型の大きな窓を設けるものである。通



図8 茶葉末釉車輪座枕

（杜 2018より）

気性を良くして頭を冷やす効果を高めるためなのだろうか、あるいは心地よい午睡のために、ほのかに香などを焚きこめたのであろうか。いずれも陶枕の使用の様相が伺われる。

さらに、陶枕の使用の様相を伺うことができる資料に、陶枕に記された詩文がある。長沙窯で焼造された陶磁器には、瓶や皿そして枕に、吉祥に結ぶ伝統的な植物・小禽などの模様、さらに多様な詩文が記されることは良く知られている。詩文には、興味深い事例がある。長沙窯藍岸嘴出土の獸形枕（枕面長13cm・幅8.2cm・器高7cm）の方形枕面には「熟練輕客軟似綿 短衫披帛不纏 蕭郎急臥衣裳乱 往往天明在花前」の詩文が記され、同じく藍岸嘴出土の同形・同装飾の獸形枕の方形枕面には「日紅衫子合羅裙 尽日看花不厭春 更向妝台重注口 無那蕭郎慳煞人」が記される（長沙窯課題組 1996）。これらは艶情詩であるという。

芦立一郎氏によれば、艶情詩は艶情を主題あるいはモチーフとする詩作品群であり、中国では古くから詩の重要な主題であった。中唐から晩唐になると、従来の抑制された表現から、性愛情欲の表現も含んで描写されるようになり、詩の表現領域が拡大したという（芦立 2005）。枕を共にするなどの言葉が思い浮かばれるので、艶情詩である詩文の内容は、寝具である枕に記されるものとして相応しいと見ることもできる。

陶枕に記された詩文は唐代以降にも、艶情詩と同様な趣のものが存在する。村上哲見氏は宋代陶枕に記された歌辞について考察している。歌辞は北宋代の演芸場や世間で歌われ、巷間に歌い継がれたもので、これが陶枕に記されているという。神戸市の白鳳美術館所蔵の磁州窯陶枕（小学館『世界陶磁全集』13 遼・金・元 P243 図278 長48.6cm）に記される詩文は、中呂宮の調べの七娘子の曲の歌辞であると分析している。情人に去られた女性の恨みごとを主題とし、伝統的な詩の分類では「閨怨」となる。こうしたことから、この陶枕はダブルベッド用の枕、おそらく色里の備品であったに違いないという（村上 1984）。宋代の陶枕は大型化し葬具としての機能も考えられるが、この陶枕が色里に備えられた実用品あるいは装飾品であるとすれば、寝具としての機能も存在することになる。随分となまめかしい世界のことはなるが、枕の機能としては相応しい。

さらに枕面に施された紋様にも注意しなくてはならない。神野恵氏は大安寺・福岡県鴻臚館遺跡・静岡県城山遺跡から出土した、枕面に鴛鴦文が施された陶枕を紹介している。大安寺出土資料には鴛鴦に蓮の花を配した紋様がある（神野 2010）。鴛鴦は伝統的な中国吉祥図案である。野崎誠近氏によれば、鴛鴦に蓮花を配するのは「鴛鴦貴子」の寓意があり、夫婦睦まじく子孫繁栄をその意味とするという（野崎 1940）。これまた寝具としての枕を連想させる。この様に紋様にも注意を払わなくてはならないが、今回は深入りしない。

さて、城輪柵跡の官人は唐三彩半紋胎緑釉陶枕でどのような夢を見たのであろうか。都での栄耀栄華の夢を見たのであろうか。または、むしろ暑い夏の午睡を楽しんだのであろうか。あるいはひと時の逢瀬を夢に見たのであろうか。想像は広がる。

さて、唐代の枕は寝具としてのものだけではなかった。制度にもあるように、葬具としても当然のことながら存在する。法門寺地宮の水晶枕は、葬送儀礼に関係するという。

5、唐代墓葬と枕

唐代墓葬の枕を垣間見てみたい。まず、『衣物帳』に記載される陝西省宝鶏市法門寺地宮の水晶枕（図9）に注目し、ついで、西域吐魯番（トゥルファン）の『随葬衣物疏』に登場する雞鳴枕に注目したい。謝明良氏は墓葬に伴う石枕について触れ、長方形石枕が甘肅省天水市隋～初唐墓、寧夏回族自治区呉忠市唐墓（M63）、河南省偃師市李郁墓（会昌3年（843））そして水晶枕が陝西省宝鶏市法門寺地宮から出土しているとする（謝 2021）。このほかに、先程も触れた代宗の事例もある。

（1）法門寺地宮の水晶枕

水晶枕は法門寺地宮から出土し、『監送真身使随真身供養道具及恩賜金銀玉器衣物帳（衣物帳）』に記載される。唐代皇帝の懿宗が咸通14年（873）に法門寺地宮の仏舍利を都に招き、その子、僖宗が乾符元年（874）に再び法門寺地宮に戻した。『衣物帳』はこのときの儀礼に伴って作成されたものである。

水晶枕は法門寺地宮後室の下層左側にあり、この一群は僖宗に関わったものという。稲田奈津子氏の整理によれば、出土した品々は「舍利



図9 法門寺地宮水晶枕

（陝西省考 2007より）

莊嚴の埋納に対応してこの衣物帳が読み上げられ、その声に合わせて物品が地宮内へと納められ」たものとし、衣物帳の順序に従って次々と物品が運びこまれたと見た。舍利の地宮への納入は葬儀における納棺・埋葬に対応すると整理したのである（稲田 2018）。吐魯番では、随葬品の目録である『随葬衣物疏』が納棺に際して読み上げられ、墓に鶏鳴枕が納められることがある。法門寺地宮への舍利再埋納にあたって、納められた水晶枕は墓に納められた枕と同じ意味を持つのであろう。

法門寺の水晶枕は、素材と重量は異なるが、唐三彩凹面枕とほぼ同様の形態を示す。高8.9cm・長12cm・幅6.8cmで、重量が1820gである。なお、『衣物帳』には「水精枕一枚、影水精枕一枚」の2点が記されるが、地宮後室の出土品分布図には1点のみが記される（陝西省考研究院ほか 2007）。ついで、吐魯番で出土した鶏鳴枕も唐代墓葬の枕の使用を示す事例であるので、注目してみたい。

（2）鶏鳴枕の様相

鶏鳴枕は鶏の形をした枕であり、辟邪の意味を込めて漢晋のころから、子供の健やかな成長を祈る器物として、また葬送に関わる冥枕としても使われ始め、伝統は現代まで続いている。

霍雨豊氏によれば、中国西域の吐魯番アスターナ古墓群では、1959年～75年の調査で、多数の鶏鳴枕が『随葬衣物疏』とともに出土した。鶏鳴枕の形は鶏を表し、夜明けを告げる鶏が悪鬼を走らせることから、辟邪の意味があると考えられ、形は仏教の吉祥である共命鳥にも通じている。今でも河南省の農村では鶏鳴枕を葬送に使用しているという（霍 2013）。

呉姪姪氏は68点の吐魯番出土『随葬衣物疏』を詳細に分析し、内容と記される器物を整理している。この中で何らかの枕と記されるのは7点、鶏鳴枕は25点が存在する。時期は6世紀から唐代に及ぶという（呉 2012）。また枕が『随葬衣物疏』に記されるのは、分析対象の47%にも及び、枕の副葬が多数あったことがわかる。

次いで劉安志氏は、6世紀以前に江南から、西域高昌国への来訪者に「呉客」「呉児」が少なくなく、随葬品リストである『衣物疏』の風習は、江南と結びつきがあったと記している（劉・榊・稲田 2019）。西域だけではなく中国国内で広く存在した習俗であった可能性がある。

なお、鶏鳴枕の実物であるが、吐魯番学研究院で解体修理・復元（図10）が行われている（陳・趙・路 2017）。布製で両側が立ち上がり、両頭で各々に赤い鶏冠をつける枕である。両頭というのは、鶏鳴枕が共命鳥を意図したからであろう。共命鳥は仏典に登場する、一つの身体に頭が二つあるという想像上の鳥である。新疆ウイグル自治区ニア遺跡では、漢代の夫婦合葬墓で一对のミイラが鶏鳴枕を枕にしていたという。これは、先ほどの宋代の詩文が記された枕に繋がるのであろうか。いずれにしても唐代の墓送で、枕は一定の意味を持って使用されていたことがわかる。

さて、唐三彩の枕を副葬することが非常に少ないのはなぜだろう。まず、葬送に用いられる枕は、繊維製品や植物製品が中心であった可能性があろう。とすれば、唐三彩陶枕・石枕など出土数の少ない枕は、故人の遺愛品や、特別な葬送儀礼のため、通常とは違う意味付けで墓に納められたのかもしれない。

最後に、黄冶窯で焼造された陶枕が出羽国府城輪柵跡までもたらされる、移入の経路について考えてみたい。



図10 鶏鳴枕

（陳ほか 2017より）

6、黄冶窯から出羽国府へ

最初に唐三彩の分布を確認しておきたい。図11は日本国と韓国の唐三彩の出土遺跡（地点）の分布図である。日本国は亀井明德氏の『中国陶磁史の研究』所収の「日本出土鉛釉陶地名表」（亀井 2014b P268～270）を、韓国は謝明良氏の『中国古代鉛釉陶磁の世界 縦戦国至唐代』所収の「韓半島出土唐三彩標本遺址」（謝 2014b P158）をもとに作成した。図化には館内魁生氏の協力を得た。Noは図にある各国の遺跡（地点）名に一致する。小稿で主題とする、陶枕出土遺跡の数字は○で囲んでいる。

（1）生産窯から韓半島へ

まず韓国では11遺跡の出土が集成されている。このうち2・6・10の三遺跡で陶枕の出土が報告されている。分布は韓国東南部に集中し、離れて一カ所だけが西部海岸寄りに存在する。韓国東南部の集中（1～11）は慶州市内である。周知のとおり慶州は、韓国慶尚北道東部の都市であり新羅の王都であった。新羅はこの地に起り、935年に滅びるまで一貫してここを王都とした。ここからは都城と園地さらには寺院跡から主に出土している。都城と寺院跡から多く出土するという傾向は日本と共通している。さらに陶枕が多く、これもまた日本と共通している。

1の慶州市朝陽洞山出土の唐三彩甕は内部に火葬骨が納められていて、火葬骨蔵器であるという。唐三彩が墓葬に直接伴う出土事例は日本では今のところ見られない。副葬品ではないものの、墓葬に唐三彩を使用するのは中国と共通しているとも考えられる。なお、黄冶窯で同様の唐三彩甕が出土している。

一つだけ離れて分布するのが、4の忠清南道保寧市聖住寺出土資料である。ここは韓国西海岸に近く、黄海を渡れば山東半島に近い。中国との交通に関わってもたらされたと考えられる。寺院跡から出土というのは先ほどの事例に繋がる。

謝明良氏は、韓国国内の唐三彩の出土と日本の出土状況を検討した。まず移入経路であるが、朝陽洞出土の唐三彩甕は揚州双橋公社唐墓出土の唐三彩三足罐と類似し、揚州から新羅への海上交通は6日ほどであり、黄冶窯製品は揚州から運ばれたと考える向きがあるとする。これを踏まえつつも、移入経路として日本の遣唐使北路に注目する。北路は新羅道から、黄海を経て山東半島に至り、北側の登州、来州、さらに転じて陸路で青洲、兗州、曹州、卞州（開封）と至り、ついで洛陽から長安へと入る。この経路沿いには、日韓に多い陶枕や甕の出土が見られるため、慶州の唐三彩は遣唐使北路に関係する交通路で運ばれた可能性を指摘する（謝 2014b）。この交通路が結ぶさらにその先は日本となる。

さて、唐三彩の移入経路で注目される揚州であるが、ここは中国江蘇省中西部の都市であり、長江の北岸に位置し、中国の物流を支えた大運河の一大拠点である。亀井明德氏は、小型の唐三彩などが日本にもたらされたのは、下級者が揚州の市場で土産品として買い求めたのではないかと見ている（亀井 2003）。小型品に陶枕なども当てはまるのであろうか。孔超氏は唐代陶枕（唐三彩以外を含む）の出土遺跡を31カ所上げ、分布は黄冶窯6・不明3・揚州唐城20・福建省福州市1・湖北省黄梅県1を示した（孔 2014 P117～120 附表1）。揚州唐城の出土が際立つ。揚州から卞州（開封）は大運河（通済渠）で結ばれる。そこから洛陽へ結ばれ、黄冶窯は近傍となる。

以上からすれば、移入経路は南側の揚州と北側の河北省・山東省に関わる経路に注目する必要が生じる。加えれば、洛陽から北方への大運河（永済渠）も重要である。河北の唐三彩の出土傾向について、穆侑言氏は河北東南部出土の唐三彩は大部分が大運河（永済渠）沿い周辺に存在するという。さらにこの永済渠沿いの資料には、日韓で出土する甕が多く含まれている（穆 2020）。さて、先ほどの謝明良氏の示した陸路の地名は永済渠（隋唐大運河の河北段は永済渠に属している）周辺となる。この運河は隋

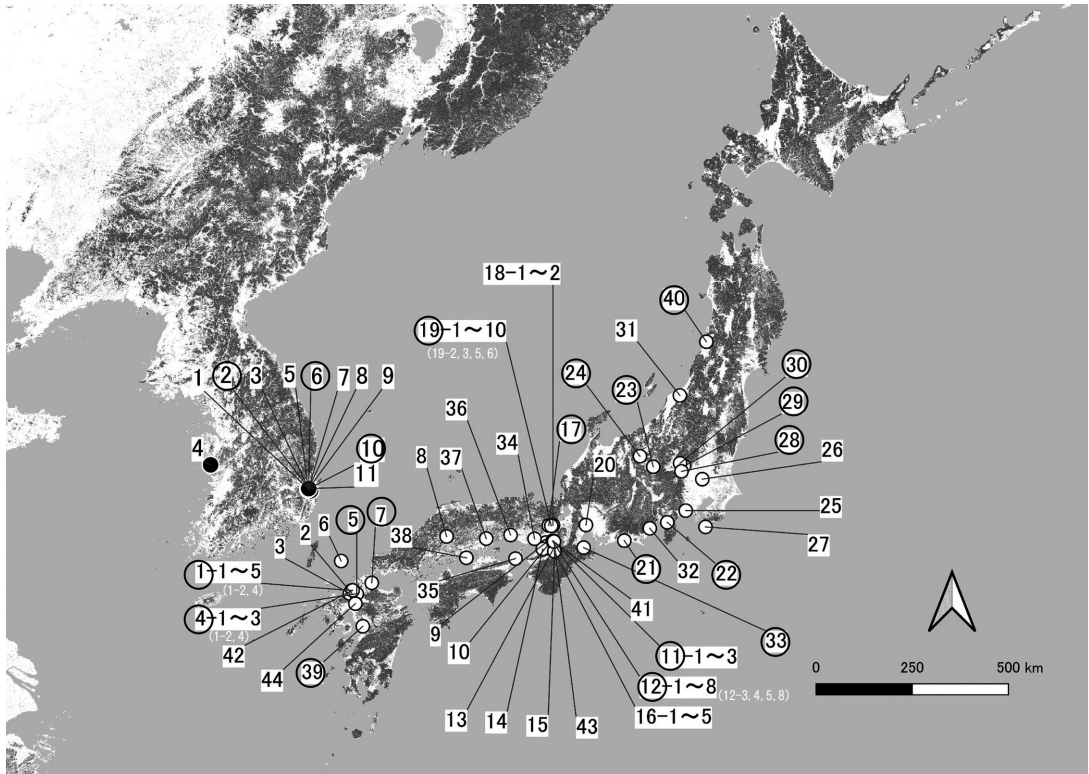


図11 日本国・韓国唐三彩出土遺跡（地点）の分布図

※○が陶枕出土地。 ※①-1~5 (1-2, 4) は下記1-2と1-4から陶枕が出土していることを示す。

■韓国分布図：謝 2014より描出

1 慶州朝陽洞、2 慶州皇龍寺、3 慶州月城塚子、4 忠清南道保寧聖住寺、5 慶州皇南洞三七六遺址、6 慶州新羅王京遺址、7 慶州東川洞、8 慶州蘿井、9 慶州芬皇寺、10 慶州味吞寺、11 慶州九黃洞

■日本分布図：亀井 2014より描出

1-1 鴻臚館跡第4次調査SB32、1-2 鴻臚館跡第5次調査pit23、1-3 鴻臚館跡第7次調査SK255、1-4 鴻臚館跡第19次調査SD1240、1-5 鴻臚館跡第21次SK15017、2 福岡市柏原M遺跡包含層、3 福岡市東入部遺跡第10次調査G2区包含層、4-1 大宰府史跡第60次調査（蔵司跡南）包含層、4-2 大宰府史跡・観世音寺跡SD1300、4-3 大宰府史跡・観世音寺跡SB72、5 太宰府市市の上遺跡、6 宗像市沖ノ島第5号・7号遺跡、7 菊田町谷遺跡Ic地区2号pit、8 備後寺町廃寺講堂基壇上層、9 若江遺跡（廃寺）第38次調査、10 鳥坂廃寺講堂仏壇拉張部土坑、11-1 奈良市大安寺町1他、大安寺跡講堂前面土坑、11-2 大安寺跡第68次調査金堂跡北辺焼土層SK24、11-3 大安寺跡第92次調査 南大門跡基壇覆土上層、12-1 奈良市五条町204-1（右・五・一・十五）、12-2 奈良市八条町792-1（左・七・二・六）、12-3 奈良市菅原東遺跡SD200（右・二・三・四）、12-4 奈良市法華寺町五双田265-1他（左・二・二・十二）、12-5 奈良市二条大路南一丁目（左・三・二・八他）、南西包含層・長屋王邸宅、12-6 奈良市二条大路南一丁目（左二・二・五）、東二坊坊間西側溝SD5021最下層・長屋王邸宅、12-7 奈良市大宮町2丁目153-13・14（左・三・四・十一）、12-8 平城宮東院園地地区6 ALF、整地土、13 榎原市醍醐町133-1（藤原京右二・三・東南坪）、14 御坊山3号墳、15 安倍寺回廊跡、16-1 坂田寺跡奈文研第1次調査、16-2 坂田寺跡奈文研第2次調査 井戸SE110、16-3 坂田寺跡奈文研第2次調査包含層、16-4 坂田寺跡奈文研第7次調査回廊雨落溝B、16-5 坂田寺跡奈文研第8次調査掘立柱建物雨落溝、17 京嵯峨大沢町4、大覚寺御所跡SD43、18-1 左京区北白川大堂町56、北白川廃寺下層、18-2 京都市左京区北白川小倉町別当町70番地、整地層（SI第1-1層）、19-1 上京区出水通知忠院西入田村備前町236-10、HQ-73SK07、19-2 中京区西ノ京中御門西町25朱雀第八小内（右・二・三・二）、19-3 中京区錦小路通鳥丸東入ル元法然寺町（左・四・四・五）、19-4 下京区鳥丸通花屋町下ル常葉町（左・七・三・十五）、19-5 下京区塩小路通鳥丸西入東塩小路町614（左・八・三・二）SD29、19-6 南区東九条西山王町27-1他、（左・九・三・十六）、暗灰色砂泥層、19-7 下京区仏光寺通東洞院東入ル（左五、四、二）、19-8 下京区五条鳥丸町高砂町（左六、三、十）SK283、19-9 中京区壬生西大竹町12他（右・四・二・六）、19-10 中京区壬生西大竹町12（右七・一・二・三）朱雀大路西側溝（SD465、B第3層）、20 繩生廃寺塔心礎、21 城山遺跡A10B30区第IV層、22 上ノ壇遺跡41-13グリッド、23 前田遺跡H18号住居跡、24 屋代遺跡群町浦遺跡C区（CM-9、C0-6）、25 諏訪前A（四ノ宮下郷）遺跡SE06下層、26 向台遺跡谷包含最下層、27 安房国分寺推定金堂跡、28 熊野遺跡第5次調査第3号堅穴住居跡覆土中、29 境ヶ谷戸遺跡2号住居跡、30 多田山12号墳前庭部、31 阿賀野市山口遺跡、32 静岡市ケイセイ遺跡SR01内、33 三重県斎宮跡第157次調査、34 芦屋廃寺62次調査C層、35 波路国分寺跡表採、36 姫路市池ノ下遺跡、37 備前国分寺講堂跡、38 福山市宇治島祭祀遺跡、39 熊本市二本木遺跡第28次F地点、40 酒田市城輪柵跡IMI13地点、41 奈良市西大寺旧境内内、平城京跡右京一条南大路北側溝（SD101）、42 福岡市博多区祇園町317、318番、博多遺跡群第50次調査、43 奈良市大森町、平城京左京五条四坊十五・十六坪、五条北小路北側溝出土、第557・568次調査、44 久留米市安武町野浦塚遺跡B地点SB40柱穴内

の煬帝が建設したもので、高麗への遠征軍もこの運河を通るなど、韓半島への連絡に重要な意味があった。

日本にもたらされた唐三彩は、多くは洛陽の東側にあたる黄冶窯の製品となろうが、生産地から永斎渠さらに山東半島から新羅を越えて日本へと向かったのか。それとも生産地から開封さらに通斎渠で揚州へと運ばれ、日本へと向かったのか。あるいはその両方なのか。いくつかの可能性がある。

(2) 生産窯から日本、そして出羽国へ

黄冶窯で生産された器物である唐三彩は古代日本にもたらされ、蓄積・使用された。亀井明德氏の集成は74遺跡に及ぶ。亀井氏の業績に敬意を表したい。南は熊本県から北は山形県に広がり、拡散的な様相を示している。図中には集中する地点（枝番が付される地点）と、単独の地点があるものの、韓国では拠点的に分布するのと対照的である。

集中地点に注目すれば、1 鴻臚館、4 大宰府、11 大安寺、12 平城京、16 坂田寺、18・19 平安京となる。鴻臚館・大宰府は古代対外貿易の拠点であり、こうした関係から蓄積・消費されたものかと思われる。11世紀代から対外貿易の拠点となる博多では、2 遺跡が集成されているに過ぎず、唐三彩が盛んに輸入されたのは、博多を利用する以前であることを示している。このほかに集中があるのは、平城京と平安京である。現在の行政区分で数えれば、福岡県が15地点、奈良県が21地点、京都府が13地点であり多い。輸入拠点から政治拠点に運ばれ、さらに地域に分散すると見られるのではなかろうか。なお、日本の彩釉陶器の分布と比較すれば、共通する様相が見られる（五島美 1998 P262～263）。ただし彩釉陶器の分布が多い北陸地方では、唐三彩の出土を知ることが出来ず、東北の拠点である多賀城の出土事例も知ることはできない。

さて、出土遺跡の種別であるが、まず寺院が多く次いで邸宅と官衙が続く。注目すべきは古墓とされる、14 奈良県御坊山3号墳の三彩蓋甕、30 群馬県多田山12号墳前庭部の三彩陶枕の事例

である。副葬したものと見るかどうかであるが、少なくとも唐代墓葬と同じ唐三彩器物の使用と同じと考えるのは難しいと考える。

唐三彩の出土器種は圧倒的に陶枕（亀井氏分類の筐型品を含む）が多い。74遺跡中29遺跡での出土となる。分布は畿内・九州・東海・関東・東北と広範囲である。最北は40 酒田市城輪柵跡、最南は39 熊本市二本木遺跡であり、日本の最北と最南の唐三彩の出土事例が陶枕である。東日本では圧倒的に陶枕の出土が多い。出土遺跡も寺院・官衙・邸宅・住居（29 群馬県境ヶ谷戸遺跡2号住居跡、23 長野県前田遺跡H18号住居跡など）・古墓・祭祀遺跡と多様である。唐三彩陶枕は日本で広く必要とされた器物であったことを示す。不思議なことに瀬戸内に陶枕の分布は薄い。

さて、分布図から唐三彩の移動について考えてみたいが、まず瀬戸内海沿いに8・38・37・36・35・34が分布する。これは唐三彩の移動が舟運であったと考えれば理解しやすい。この地域の主要交通路は瀬戸内海舟運である。日本海側でも舟運により移動した可能性がある。北陸・東北には新潟県31・山形県40と分布は広がるがいずれも日本海に近い。31 新潟県阿賀野市山口遺跡で出土した三彩琴頭は、日本ではまれな唐三彩俑であり、演奏する女性の膝上に乗せた琴の龍頭の部分が出土している。ここは阿賀野川に近く、日本海舟運との関連が考えられる。このほかの分布であるが、太平洋岸は33・21・32・22・25と沿岸に分布し、27 千葉県安房国分寺推定金堂跡が最北となる。これも舟運を利用したの分布と理解しやすい。内陸の東山道を利用したの拡大も当然あり、長野県・群馬県・埼玉県の24・23・30・29・28・26などの分布は、東山道の陸運と理解しやすい。

出羽国府出土の唐三彩緑釉半紋胎陶枕は、日本に輸入されたのちに、大宰府から平城京に移動し蓄えられ、後に平安京に運ばれたか。あるいは大宰府から平安京に移動し、蓄えられた可能性があろう。その後、官人の移動に伴って出羽国府にもたらされた可能性が考えられる。その時には、日本海舟運を利用した可能性が高い

のではなからうか。最後に唐三彩陶枕の周辺について、国外の様相に触れておきたい。

まとめにかえて

最後に、唐三彩陶枕の周辺について視野を広げて補足してみたい。

まず、焼造であるが、中国国内の唐三彩の出土は長江より北側にその主体がある。圧倒的に多いのは陝西省と河南省であり、南側では四川省・江西省・浙江省などで出土しているが数は少ない(奈文研 2010 P33~52)。唐三彩陶枕の出土も少ない。唐代の枕を生産した窯跡もほとんどが長江より北側あるいは長江沿いの地域に位置する。ただ広東省潮州市東筆架山の潮州筆架山窯が離れて存在するが、黄冶窯と同法量の方形枕(広東省博 1981)を焼造するものの数は少ないようであり、中国南部では唐代の陶枕の焼造はほとんど見られない。

ついで、五代から北宋にかけては、新たに越窯で獣形枕や器材枕が焼造される。従前の中国北部を中心とする、唐代の陶枕を焼造した窯でも生産が続くが、広東省の潮州窯や雷州窯でもさかんに焼造される(葉 2019)。しかしながら、日本に移入される陶枕は少なくなる。宋~元代にかけて有名な磁州窯・吉州窯などの陶枕、さらに、中国の他の窯の陶枕も含めて、唐三彩以降の陶枕は博多、平安京、青森県浪岡城跡で少数出土するものの、ほとんど見られなくなる。奈良・平安時代と続いた焼造も行われない。

他方、韓国では12世紀に陶枕の焼造が行われるようになる。日本で平安時代前期で焼造が終了するのと対照的であり、北宋から南宋・元に中国で陶枕が多く焼かれるのと連動している。大阪東洋陶磁美術館所蔵の高麗青磁、青磁陽刻双鶴文枕はその作品であり、よく知られている。この陶枕には片側に方形孔が焼造後に開けられ、花活けとして使用された。また、出土品にも高麗青磁枕がある。京都市中央区で室町時代の地層から出土している(高 1996)。新安沈船を参考とすれば、鎌倉時代から室町時代にかけて輸入されたのであろう。

韓半島では12世紀代になると焼造が始まるので、盛んに陶磁器を生産したベトナムを含む、東南アジアの陶枕生産の状況が興味深いところであるが、管見の文献では、多様な器物の焼造を知ることができるが、陶枕の記載は発見できず、よくわからない。

次に、中国製の陶枕の流通をさらに地域を拡大して確認してみよう。

まず、東南アジアの様相であるが、日本に盛んに唐三彩が移入された時期と重なる、唐代の沈没船の積載物が注目される。著名な9世紀代のインドネシア沖沈船、黒石号(Batu Hitam)には積載物を報告している文献に、管見の限り陶枕を見出すことはできない。もっとも出水した時点でかなり流出したというから、不明な点は残る。次いで、9世紀代初めのベトナム沖沈船、Chau Tan 沈船でも、管見の限り積載物中の陶枕は明らかではなかった。報告書を準備中ということであるから、陶枕積載の可能性はあろうか。

次いで西アジアの様相であるが唐三彩は、エジプトのフスタートはじめ中近東で出土していて、これら消費地資料にも陶枕が含まれるかどうか興味深いところであるが、これまた管見の限りでは探し当てられない。

以上のはなはだ少ない情報からすれば、9世紀代までは、陶枕は中国北部を中心とする地域、そして韓国と日本に、唐三彩陶枕(長沙窯製品などは見当たらない)だけが、方形枕・凹面枕を主として(日本では獣形枕が、京都市大覚寺・右京三条三坊・斎宮跡などの平安京の関係地から出土するが少数)広がるようである。

10世紀代になるとインドネシア沖の沈没船、Intan 沈船に陶枕の積載がある(Michael Flecker 2002 P111)。越窯の器材枕(平面円形台座に蓮花の透かしを持ち枕面には細かな唐草が描かれている)と、獣形枕(ユーモラスな獣が伏せているもので枕面が喪失している)の2点であり、唐代に見られる方形枕はない。

この後の様相は、元代の韓国新安沈船から景德鎮窯の青磁荷葉型枕(東京国立博 1983 No.45)、さらに高麗青磁の長方形枕(側面有孔)

が出水している。また、シンガポール国立大学博物館には破片ではあるが、出土資料の白磁建築枕（14～15世紀と表示）が所蔵されているのを実見した。おそらく景德鎮窯の製品であろう。

はなはだ曖昧ではあるが、東南アジアあるいは西アジアへの輸出品には、唐代には陶枕は少なく、五代～北宋になると、獣形枕などの珍奇な陶枕が輸出され、後代にも数は多くはないが継続するのであろう。東アジアでは日本と韓半島へは9世紀段階までは、唐三彩陶枕が盛んに輸出されるが、その後はほとんど見られなくなる。日本では唐三彩陶枕に習った陶枕の焼造も行われた。さらに中国で陶枕の焼造が盛んになる宋・元代には韓半島で、枕が焼造されるようになる。これらの枕（高麗青磁を含む）は日本に輸入されるようになるが、おそらく東南アジアあるいは西アジアへの輸出と同様、数は少ないようである。

最後に、唐代の陶枕には「盈」の文字が記されているものがある。1960年に出土した山西省長治市唐墓から出土した、邢窯で焼造された「白釉“盈”字款方枕」には、「盈」の文字が底面に刻まれていた。方形枕（高7.7cm・長15.2cm・横11.2cm）であり法量もほかの唐代の方形枕とほぼ同じである（石 2008 P61）。さてこの「盈」の字であるが、新井崇之氏によれば「邢窯白磁に施された「盈」・「大盈」は内庫、すなわち皇帝専用の品を意味し、通常の土貢と区別された特別な瓷器であった可能性が考えられる」という（新井 2020）。陶枕は皇帝に納められる器物でもあったのである。謝明良氏は、黒石号から出水した「盈」・「奉進」の文字が刻まれた陶磁器について考察し、貿易船である黒石号にも積載されていることから「盈」字があるものは、本来は宮廷の器物であるが、商品としての性質もあったとする（謝 2002）。こうした唐代の制度を含んだ陶枕の位置づけについては、今後も注目しておきたい。

成稿にあたり以下の方々（アルファベット順）からご教示と、多大な助力を得た。新井崇之、范佳楠、稲田奈津子、石黒ひさ子、李凱、이현우、狭川真一、柴田圭子、館内魁生、田代裕一

朗、渡辺裕司、吉田歆、謝明良。記してご厚情に感謝申し上げます。

参考・引用文献一覧 ＊アルファベット順

- ・愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』P339～334
- ・芦立一郎 2005「唐末の艶情詩について」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』創刊号 P31～42
- ・新井崇之 2020「文字銘のある瓷器からみた唐～五代期の貢納制度について」『中国考古学』第20号 P241～262
- ・曹錦炎主編 2008『中国出土瓷器全集 9 - 浙江卷』科学出版社 P122
- ・長沙窯課題組織編 1996『長沙窯』紫禁城出版社 P141～155
- ・陳玉珍・趙靜・路瑩 2017「吐魯番博物館館藏雞鳴枕的保護与修理」『洛陽考古』第4期
- ・杜文 2018「黃堡窯：唐代陶瓷枕探英」『收藏』第6期 P74～76
- ・五島美術館 1998『日本の三彩と緑釉一天平に咲いた華一』
- ・広東省博物館編 1981『潮州筆架山宋代窯址発掘報告』文物出版社 P57
- ・八賀晋 1981「奈良・大安寺出土の陶枕」『考古学ジャーナル』196号 P26～29
- ・何国良 1999「江西瑞昌唐代僧人墓」『南方文物』1999年 第2期 P8～9
- ・河南省鞏義市文物保護管理所編著 2000『黄冶唐三彩窯』科学出版社
- ・河南省文物考古研究院ほか編 2016『鞏義黄冶窯(上)』
- ・霍雨豊 2013「雞鳴枕探析」『広州文博』2013年1期 P265～270
- ・降幡順子・巽淳一郎 2010「非破壊分析から見た黄冶唐三彩の特質」『奈良文化財研究所研究報告』第2冊 P35～48
- ・胡彦羽 2008「紋胎陶瓷器初步研究」吉林大学硕士学位论文論文
- ・稲田奈津子 2018「納棺・埋葬儀礼の復元的考察—トウルファン出土随葬衣物疏を中心に—」『律令制と古代国家』P442～470
- ・井上喜久男 2001「東国官衙遺跡にみる三彩・緑釉陶器」『月刊考古学ジャーナル』475号
- ・神野恵 2010「大安寺陶枕再考」『奈良文化財研究所研究報告』第2冊 P49～61
- ・考古研究所安陽発掘隊 1959「安養隋張盛墓発掘記」

- 『考古』1959年10期 P541～545
- ・加藤瑛二・王小蒙 1999「唐三彩枕」『名城大学教職課程部紀要』第32巻 P53～79
 - ・亀井明德 2003「日本出土唐代鉛釉陶の研究」『日本考古学』第一六号 P129～155
 - ・亀井明德 2014a「Ⅱ-6 三彩陶枕と筐形品の形式と用途」『中国陶瓷史の研究』P221～241
 - ・亀井明德 2014b「Ⅱ-8 日本出土唐代鉛釉陶の研究」『中国陶瓷史の研究』P268～337
 - ・高正龍 1996「京都出土の高麗青磁象嵌方枕について」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第2号 P127～144
 - ・孔超 2014『陶瓷枕具研究—以唐至宋元時代為中心』復旦大学博士学位論文
 - ・李輝柄 2004『長沙窯 総述巻』湖南美術出版社 P101～105
 - ・林士民 1982「浙江寧波出土的唐宋医薬用具」『文物』1982年8期 P91～93
 - ・劉安志著・榊佳子翻訳・稲田奈津子解説 2019「中古衣物疏の起源と変化」『法制史研究会会報』第22号 P234～25
 - ・Michael Flecker 2002「The Archaeological Excavation of 10th Century Intan Shipwreck」BAR International Series1047
 - ・森下恵介 2016「大安寺の遺跡と遺物」『大安寺の歴史を探る—大安寺歴史講座2』P115～123
 - ・穆俏言 2020「河北出土唐三彩初步研究(上)」『東方収蔵』2020年23期 P39～48
 - ・村上哲見 1984「陶枕詞考(「全宗詩」補遺三首)」『奈良女子大学研究年報』第28号 P15～30
 - ・檜崎彰一 1999「日本出土的唐三彩」『中原文物』1999年第3期 P43～53
 - ・檜崎彰一 2002「三彩と緑釉」『東洋陶磁史—その研究の現在』P139～147
 - ・奈良文化財研究所 2006「黄治唐三彩窯の考古新発見」『奈良文化財研究所史料』73冊 P33～52
 - ・野崎誠近 1940『吉祥図案解題 支那風俗の一研究』平凡社昭和15年再版本 P378～381
 - ・憑晨 2019『絞胎陶瓷器研究』鄭州大学碩士学位論文
 - ・佐々木達夫 1991「61美濃窯による優品」『日本史小事典〈陶磁〉』P184
 - ・陝西省考古研究所 1992『唐代黄堡窯址 上冊』文物出版社
 - ・陝西省考古研究院ほか 2007『法門寺考古發掘報告』文物出版社 図26～27
 - ・石金鳴主編 2008「山西」『中国出土瓷器全集』第5巻 P61
 - ・史林花 2019「多元文化共存的唐代絞胎枕」『文物天地』9期 P22～26
 - ・高橋照彦 2002「日本古代における三彩・緑釉陶の歴史的特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集 P371～406
 - ・高橋照彦 2012「遼寧省唐墓出土文物的調査与朝陽出土三彩枕の研究」『朝陽隋唐墓葬發現与研究』遼寧省文物考古研究所・日本奈良文化財研究所編著—北京：科学出版社 P221～242
 - ・巽淳一郎 1984「大安寺の土器類」『大安寺史・史料』935～956
 - ・巽淳一郎 2002「唐三彩関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』109
 - ・東京国立博物館編 1983『新安海底引き揚げ文物』
 - ・上田秀夫ほか監修 2004 上田秀夫ほか監修 2004『唐三彩展—洛陽の夢』P178～189
 - ・吳姪姪 2012『吐魯番出土遺物疏輯録及所記名物詞匯釋』西北師範大学碩士学位論集
 - ・謝明良 1985「唐三彩の諸問題」『美學美術史論集』第五輯第二部 P3～209
 - ・謝明良 2002「記黒石号(Batu Hitam) 沈船中の中国陶瓷器」『台湾大学美術史研究集刊』第13冊 P1～60
 - ・謝明良 2014a「第一章中国鉛釉陶起源問題」『中国古代鉛釉陶の世界 縦戦国至唐代』石頭出版 P15～32
 - ・謝明良 2014b「第六章韓半島和日本出土的唐三彩」『中国古代鉛釉陶の世界 縦戦国至唐代』石頭出版 P155～179
 - ・謝明良 2021「再談唐代鉛釉陶枕」『陶瓷手記4』上海書画出版社 P29～41
 - ・矢野憲一 1996「神さまの御枕」『枕』ものと人間の文化史81 P51～58
 - ・山口博之 2010「奥羽の初期貿易陶磁器」『北方世界の考古学』P79～100
 - ・葉丹洋 2019「広東名窯陶瓷枕」『文物天地』2019年9期 P13～17
 - ・弓場紀知 2002「東アジアの鉛釉陶器の意義と位置づけ—西アジアとの比較において」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集 P353～369
 - ・鄭州市文物考古研究所編 2003『鞏義柴田晋唐墓葬』科学出版社